



五カ国の領主として駿府へ

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなり



家康公は生涯に六回、大きな戦いをしています。

一は、姉川の戦いで、織田・徳川連合軍が朝倉・浅井連合軍を近江の姉川で散々に破ったものです。家康公二十九歳の元亀元年（二五七〇）のことです。この年、岡崎城から浜松城に移りました。

二は、その二年後の元亀三年（二五七二）、三河に侵入した武田信玄と三方ヶ原で戦い、完敗を喫しています。鎧袖一触がいのそでいちふくといった感じですね。しかし信玄はその翌年亡くなり、新たな強敵は信玄の嫡子・勝頼となります。家康公三十一歳の時です。

三は、さらに三年後の天正三年（二五七五）、長篠・設楽原の戦いです。家康公三十四歳のこの戦いで、織田・徳川連合軍は信玄亡きあとの武田軍を大破します。

このあと約六年間にわたり家

康公と武田勝頼との戦いは続きますが、天正十年（二五八二）三月に織田・徳川連合軍は甲斐に入つて勝頼を破り、名家武田家は滅亡します。その結果、家康公は駿河一国を領地に加え、三河、遠州、駿河三国の領主となります。

しかし、その三カ月後に本能寺の変が起こり、信長は四十九歳で亡くなり、二十年間続いた織田・徳川連合は終わりを告げました。家康公四十二歳の時です。

信長の死去により旧武田領に空白が生じ、家康公は侵入してきた後北条氏と戦い、甲斐、信濃両国を押さえます。これで五カ国の領主となつたわけです。

四は、本能寺の変から二年後の天正十二年（二五八四）家康公四十三歳の時、天下人たらしめていた秀吉を相手に、織田信雄のぶかつ（信

長の次男）と連合して戦つた小牧・長久手の戦いです。この戦いは八カ月にわたる両軍の対陣で、戦闘らしいものは一回だけですが、これは家康公の完勝でした。

しかし、この間の謀略戦は秀吉のほうが二枚も三枚も上手で、サツサと信雄と和睦してしまい、名分を失つた家康公は軍を退き、度重なる要請を受けて秀吉の指揮下に入りました。家康公には不本意だったと思われませんが、一端そうなたからには、今度秀吉が死ぬまで、完全に秀吉を支えることを崩しません。

天正十四年（二五八六）、家康公はなつかしい駿府へ移りました。

そして天正十八年（二五九〇）小田原攻略のあと、秀吉の命で後北条氏の旧領である関八州に移封となります。家康公四十九歳でした。

浜松城。家康公は元亀元年（1570）、岡崎城を長男・信康に譲り、浜松城に居を移し、29歳から45歳までの壮年期の拠点とした。（写真提供：浜松観光コンベンションビューロー）

